

# 緑生瓦版

2009.01.01  
第十八号

## 謹賀新年

旧年中は格列のお引き立てを賜り厚く御礼申し上げます  
本年も倍旧のご愛顧の程お願い申し上げます

平成二十一年 元旦

### 平成二十一年の年頭にあって

経営上の難儀はいつ降りかかってくるかわかりません。まるで晴天の霹靂のようです。今年も赤字基調から漸く黒字に転換し始めた矢先であるのに、アメリカのリーマン・ブラザーズに始まる金融恐慌による株価の暴落のあおりを受けて、銀行の貸し渋りが夏頃から始まりました。貸し渋りにあえば、これまでの努力も水の泡になるどころか、黒字倒産までしかねません。幸いにして必要な資金は調達できましたが、世界経済の動向がわが社のような小さな会社にも直接影響を及ぼす時代になったのだと実感しました。世界経済は、想像以上にコンパクトな存在になっているのかもしれない。



アメリカの新しい大統領が、「チェンジ」を標榜して当選しましたが、それは今日の事態にジャストなタイミングだったように思います。「チェンジ」について考えれば、アメリカでは「変革」の予感がありますが、日本においては疑心暗鬼です。わが国では、本質が問われないで、形式だけに終始しています。これまでやってきた変革は、入れ物の名前を変えるだけで、中身の変革をやっていません。こんなことをいつまでも繰り返して

いるようでは、未来はありません。これからの日本を考えて行くには、地方にもっと権限と税金を委譲して、本格的に地方分権へ移行していくことが必要なのではないかと思っています。

昨年は新しい夢を持って会社経営にあたるという手前、あまり不平不満ばかりを言ってもいられません。夢を語る必要があります。ということで、私の緑生研の経営上の夢について語りたと思います。話は今から、三十五年以上前のことになります。会社をはじめたにあたって、「適塾」のイメージがありました。「適塾」というのは、緒方洪庵が江戸の末期に開いた蘭学の私塾で、時代の魁となる人物を多く輩出した塾です。福沢諭吉なども塾頭をしていました。司馬遼太郎の小説で読んで気に入っています。社員が世の中のためになる新しい技術を学んで、魁として社会に貢献できる会社を「イメージ」していました。そして、お互いに緊密な信頼関係を持ちながら仕事をしたいける会社が「私の夢」でした。現在の緑生研を思うに、社風には「適塾らしさ」は出ていると思います。肝心の技術や存在においては、まだまだ「夢」には遠く及びません。これからも一歩



一歩、夢に向かって努力を積み重ねていく必要があると思っています。

とはいえ、会社経営の場合には、夢ばかりを語ってもいられません。社員の生活のためにも、夢を語る一方で、基盤となる会社経営を安定したものとする必要があります。現在、なにをすべきかについては、十分に分かっています。今年、そういう課題をひとつずつ確実にこなして、次世代に繋げる会社を築いていくことを目標にして頑張っていきたいと思っています。

平成二十一年も「夢」と新しい「目標」を掲げて、それに向かって着実に歩を進めていきたいと考えています。

今年こそと思い続けて三十五年

夢よ、いつかは正夢となれ

どうかよろしくお願い申し上げます。

代表取締役

井上 康平

# 平成二十一年「リンサルの品格」を胸に

新年あけましておめでとございます。本年もお引き立ての程、よろしくお願い申し上げます。

平成二十一年、地球規模での経済混乱の中で新しい年を迎えました。混乱しているのは経済ばかりではありません。政治の世界に目を向ければ、一年ごとに首相が代わり、就任して数ヶ月の現首相の支持率は右下がりのまま。街を歩いていてもいつどこで、誰でもよかった」の標的になるかわかりません。経済も政治も社会も、混乱した不安定な時代の中で右往左往している。そんな時代です。

こういふ不安定な時代の中、ふと気が緩めば弊社なんか、揉まれてはぐれて消えてしまうのではないかと。しかしこんな時代だからこそ、規模が小さくて、身軽でフットワークのいい組織には活路がある。そう信じて前向きに進んでいきたい。と考えるようにしています。

正月ですので、お屠蘇気分です。ただ話にお付き合いください。先日、NHK大河ドラマ『篤姫』が、高視聴率を記録して終わりました。中学生の頃から徳川頼貞の薩長嫌いで通ってきた私は、薩摩島津家から江戸に乗り込んできた姫君の物語なんてとんでもないと、最初のうちは拒絶していましたが、子ども達に裏番組の『どうぶつ奇想天外！』を見せました。しかし何時しか画面をちらちらと見

るようになり、特に物語の終盤落飾の後、十四代將軍が早世し、十五代將軍が不在の江戸城で、徳川家を守るために尽力する展開に、引きつけられるようになりました。

物語の終盤、「守りたいのは徳川の心」という台詞が出てきます。「徳川の心」とは何でありましょうか。私は「武家の品格」であると考えました。やがて明治の世となり、土農工商の枠組みが廃され、世の仕組みが大きく変わります（現在の様々な規制緩和に通ずるものがあるように感じます）。武家の商法という揶揄を込めた言葉も生まれますが、「武士道」の精神を尊んできた武家にとっては、精神的にも経済的にも、しのぎつらい憂き世であったことでしょう。

『品格』という言葉が流行したのは、一昨年のことだったでしょうか。私たちコンサルタントも生物技術者も、私たちの『品格』を意識していきたい。そう考えます。もちろん同時に、己の『分(ぶ)』というものを弁えながらのことですが。先に書いた「身軽でフットワークよく」とは、相容れないこともあるかもしれませんが、それなりの誇りと覚悟を胸に、自然への感性と生物技術を一層研ぎ澄まし、社会に貢献していきたい。そう考える次第であります。

取締役

田中 利彦

## アンケートのお願い！

Q.「緑生瓦版」のなかで取り上げてほしい内容や、ご意見、ご感想などを教えてください。

差し支えなければ、会社名、所属、氏名をお教え下さい。

会社名：

所属：

氏名：

ご協力ありがとうございました。

恐れ入りますが、アンケートの回答は、**緑生研究所(坪山)宛に FAX(042-487-4334)** でお願いたします。

### 編集後記

お読みいただき、ありがとうございます。第十九号は、年度末の追い込みだった中の三月一日の発行を予定しています。特集では、異動などがありましたので、スタッフの所属等を改めて紹介させていただきます。

岩手県奥州市には「牛の博物館」なるものがあります。牛の進化の過程や形態的な特徴などが分かりやすく紹介されています。さらに人との関わりに関する展示にも力を入れていきます。ヌーヤキリン、インバラなどの角(頭骨)、全国の銘柄牛のホスターなど、目を引く展示物も数多く見られます。せっかくの丑年、訪ねてみてはいかがでしょうか。



コラム

